

命の輝き伝えたいから

北海道美瑛町で九日、開かれた「びえい九条の会」総会で、旭山動物園前園長の菅野浩さん「あさひかわ九条の会代表委員」が「動物と平和」と題して講演し、参加者の感動を呼びました。当日の講演の内容を紹介し

旭山動物園前園長
菅野 浩さん



9条は本当に大事

手の指紋が分かりやすい。お金があっても何かできることをやろうと、みんなの前でファンポイントガイドを始めました。

実際に話してみると、お客さんが何に興味を持ち、どういった話を聞きたいか分かってくる。動物の素晴らしさを伝えるため、おりの中の木を立体に組んだり、飼育係が牛乳を始めた。例えばサル山では、透明アクリル板にハチミツを塗る。サルがなめるたびに「あ、おいしい」とつぶやく。ヒヨウはおりの一番高い所について、満足しています。だから、下で人間が「わー」といっていても全然気にしません。

日常動物と接しているのは拒否者です。私と意見が違ったら、彼らの意見を尊重しました。

旭山開園のとき、中保充志さんという動物園界の大先生が来られました。戦前、旧満州(中国東北部)の動物園をつくった人です。戦争が激しくなり、軍隊が動物を殺せと命令したそうです。

「あのわんこ飼育くん、私は抵抗して宿舎で布団をかぶっていました。そうすると『グワ』と動物の音が聞こえるんですよ。『ごめんね、ごめんね』と泣きました」と二回話されました。それが心に残っています。

動物園は戦争では成り立ちません。動物園にかかわる人間は、戦争は絶対だめだと思っています。同じ地球上に生きる命を相互に共有していると確信。共有しているのが動物園です。彼らを絶滅から救うために私たちに何ができるのか、地球温暖化や環境保護に関心をもち、学ぶ場なんです。

私は、九条は本当に大事にしなくては行けない、日本が誇るものだと思います。命の輝きを伝えていくということは、共感しあうことです。

北海道美瑛町での講演から

ていきました。

ほとんどお客が滅びていきました。

動物園が開園したのは一九六七年です。「動物と愛しめる場所がほしい」と市民運動が起きました。私たちはそのことを大事にし

残酷施設だといわれ、

私は飼育係と夜を徹して「動物と接すること

「ぞうれっしゃがやってきた」を指導されている全国のみなさまへ

すてきな週刊<うたごえ新聞>を読み広げてください!

全国で「ぞうれっしゃがやってきた」(以下「ぞう」)を指導して下さっているみなさんに、ぜひ読んでいただきたい新聞があります。週刊<うたごえ新聞>です!

1986年の「ぞう」初演以来、うたごえ新聞は全国各地のすばらしい取り組みの様子や、キラキラ輝く子どもたちの笑顔を毎週のように掲載し、今の時代にこのような取り組みをすすめていくことの大切さやよろこびの声を、どんな新聞よりも数多く積極的に取り上げてきてくれました。

来年2009年は本物のゾウ列車が走った1949年(昭和24年)からちょうど60周年になります。それは東京の上野動物園にゾウのインディラが寄贈されてから60年でもあります。『アジアの子どもたちが互いに争うことなく平和な世界を築いていってほしい』というインディラに寄せる願いは、今もなお大きな意味を持っています。

「ぞう」をうたいながら、うたごえ新聞であなたの地域や学校・合唱の感動の取り組みを互いに交流し合い学び合いましょ! 私たちがつくり広げていく、このうたごえ新聞の広がり、は、「ぞう」で願う平和な世界をつくる大きな力になっていくと信じています。私もたくさんの人に読んでいただけるよう、おススメしています。あなたもぜひお読みください。

2008年3月30日
「ぞうれっしゃがやってきた」初演の日に
「ぞうれっしゃがやってきた」作曲者

夢
すてきな
うたごえ
新聞

藤村記一郎